

治癒の感覚論

形態と解釈

三木 博

序：問題の所在

「形象と意味は同一であって、形象が形づくられるように、意味は明瞭化する。形態は本来いかなる解釈も必要とせず、それ自身で意味をあらわしている」¹⁾。これはユング(Jung, C. G. 1875-1961)が論文「心の本質についての理論的考察」(1946/54)のなかで述べた言葉である。形象、とりわけ象徴性のヴェールに深く覆われたイメージの解釈に生涯の課題を見いだしたユングらしい言葉であろう。また同論文の別の箇所では「形象は本能の意味を表す」²⁾とも述べられ、元型理論をあらためてその生命基盤との共鳴関係から把握しなおそうとする晩年の関心が顕著に窺える。³⁾ いわば形象(形態) 意味(解釈) 生命が取り結ぶ重層的なトリアーデは、分析心理学における治療関心そのものを示唆してもよい。

本稿ではユングのモチーフを媒介としながら、形態と解釈をめぐる、またより学的在り方としては形態学と解釈学が各々提

起する課題を踏まえながら、両者の内的な交叉関係を探っていきたい。本篇ではその端緒として、遊戯療法 箱庭療法 を治療構造のモデルとして取りあげてみる。ここでは生命感覚にも深く通底するような触覚(蝕知)のダイナミズムが、治癒機制を主導していると思われ、感覚論の視点から治癒を考察するうえできわめて示唆的である。触覚を手がかりにし、その根源的とも言える生命感覚としての特質に留意しながら、あらためてユング的分析治療の意義を捉えかえしてみたい。一瞥すると知の異種交配的な試みのようでもあるが、生命基盤に今一度立ちもどることによって、考察のあらたな端緒としてみたい。

有機体の論理

ゲーテ(Goethe, J. W. von, 1749-1832)の形態学(Morphologie)は、18世紀ドイツにおける知的伝統と革新、とりわけドイツ観念論による自然哲学がおよぼす強い磁場の

1) C. G. Jung, die Gesammelten Werke. Walter Verlag, Olten und Freiburg im Breisgau. 1995 Bd. 8. 402 (Paragraphnummer).

2) ibid. 398.

3) ユング晩年の構想である類心性(psychoid)については、拙著『ユング個性化思想の構造』福村出版、1995年、第 3章第3節参照。

なかで、それと強く共鳴しながら形成された。ゲーテは、自然界の有機体のカタチ(モルフェー)のダイナミックな生成と変容のプロセスに焦点をあわせながら、軽やかに戯れながら躍動する自然の内奥にまで知的直観によって達しようところみる。こうした形態学は、そもそも昆虫から植物、そして動物のメタモルフォーゼの研究から出発したが、のちには精神のメタモルフォーゼ 人格の変容 まで射程にのびた広大な視野を獲得する。いわば不可視の精神のすがた・カタチを、可視的な自然のイメージを知的直観によって極限にまで変容させ、その作業のなかで精神のダイナミズムを感得しようとする試みである。こうした作業は、ゲーテ自然学を支える二大動輪である原型論とメタモルフォーゼという作業仮説をとおして遂行される。そしてその成果は、根源現象という知的直観のうちに収斂される対象的思惟において達成される。

さてゲーテが直観的にとらえた生命現象の発露形式 生の永遠の公式 を、あらためて理論化する際には、有機体を貫く論理とも呼べるものが、その前提とされている。精神のメタモルフォーゼ、あるいは人間形成論とも深く関わりあう人格の変容プロセスを理解するには、有機的生命の構造をモデル化して試みる必要があるであろう。

たとえば新田義弘氏によれば、伝統的な解釈学の論理を制約しているものとして、()知のパースペクティヴ性 ()有機体

の論理、()書物の原理、以上三つの性格を指摘している。⁴⁾ 氏によれば人間の知は、原理的にパースペクティヴ性 ある一定の視点による拘束性 を免れることなく、また人間にとって生きられる原理とは有機体の論理であり、解釈学は記憶の固定化としての書物の原理という文化基盤において成立してくる、とされる。

本来、解釈学とは「他者が語ったこと、ないしは書いたことをいかにして正しく理解しうるかということについて反省する学問」である。⁵⁾ 古典的解釈学を完成したシュライエルマッハー、あるいは哲学的解釈学によって解釈学を革新したディルタイは、この 理解 の方法をめぐって思索を深める。すなわちシュライエルマッハー、および心理主義的方法を重視した前期ディルタイでは、解釈者による著者の内面性への自己移入によって、理解は可能とされた。またフッサール現象学の影響を受けた後期ディルタイにおいては、心理主義的理解の方法は放棄され、晩年には著者と解釈者を客観的に媒介する共通項として客観的精神あるいは普遍的な意味連関の理念が打ちだされた。理解のあらたな可能性を開くために、ディルタイではさらに歴史的世界の再構成や類型化の試みをとおして、解釈理論がより整合化され精緻なものとなった。ただそれでも両者の解釈理論が、なんらかの共通性を前提としている点では一致している。⁶⁾ 理解 とは、そもそも著者と解釈者とのあいだの共通性を前提としてはじめて

4) 新田義弘 1997年、『現代哲学 現象学と解釈学』白泉社：217-222。

5) 麻生建 1989年、『ドイツ言語哲学の諸相』東京大学出版会：212。

6) 同書：214。

成立する、とされたのである⁷⁾のちに解釈学は、狭義の文献解釈技法やたんなる精神科学の方法論といった制約を乗り越えて、根本的な学問の方法論として確立されていくが、ここでは触れないでおく。

解釈学は、広義には人間の有機的生命あるいはその歴史的生成の構造連関を、表現世界(痕跡)を媒介としながら理解しようと試みる。解釈学の知は、歴史的に生成する生のダイナミズムを把握しようとする知である。またゲーテの形態学思想が、ディルタイの解釈学の成立過程に深い影響をあたえたことから示唆されるように、解釈学の知と形態学の知とは、基層できわめて親和的に共鳴しあっている。形態学の知においては精神は不可視な自然であり、自然は可視的な精神である。つまり形態学は、可視的な精神である自然の有機的形態の解釈学として理解されてよい。それはいわば生成と変容を繰り返す形態というテキストにもとづいて、そこから形態形成を貫いているメタモルフォーゼの精神の論理化を試みるのである。

ところでパースペクティヴ性にもとづいた視界の構造、あるいは遠近法的認識といったルネサンス以来の知に特有の対象認識の在り方は、時代の視覚中心主義の動向とも深く連動している。「世界像の時代」(ハイデガー)としての近代の視覚中心主義については、これまでたびたび論及されてきた。「西欧の文化的伝統が、しばしば、視

覚の過程のなかで、一瞬に把握し、それを永遠化する暴力的な行為を特権化した」⁸⁾。たとえばM. ジェイは、今日の解釈学の興隆を招いたのは、こうした視覚中心主義に対する反視覚的動向であった、と述べて、H.-G. ガダマー(「聴覚の優位性が解釈学的現象の基盤である」)を引用しながら、「観察の方法よりも解釈の真理への関心が増しているということが、もっとも価値ある器官として眼よりも耳をあらためて重視する」動向と連鎖する点を鋭く指摘している。⁹⁾ また同時にある種、ステレオタイプ化されてしまった反視覚的言説の死角を衝こうとする。たしかに「眼の欲」たる視覚の共時的眼ざしは、「瞬間的な全体性」を産みだし、フォーコーが指摘するような一望監視方式のような「視覚が権力と共謀しうる」可能性をつねに孕んでいよう。だが視覚作用はその強力な対象化の働きと同時に、「相互性や間主観性への可能性」¹⁰⁾をも含んでいることもたしかであろう。視覚をもはや信用しない時代、あるいは偶像破壊への衝動を深く秘めた現代にあって、「見る」ことの意義は多様に分化しつつある。むしろここでは、聴覚モデル 解釈されたコトバ にもとづく解釈学と、視覚モデル 観察されたカタチ にもとづく形態学といった、いわば感覚相互の二項対立した図式で捉えるよりも、解釈学としての形態学といった感覚が複合しあう重層モデルのほうが望まれる。

ところで精神科学を基礎づけるため、独

7) 同書。

8) マーティン・ジェイ 1996年、『力の場』(叢書・ウニベルシタス542)今井・吉田・佐々木・富松訳、法政大学出版局：158。

9) 同書：156。

10) 同書：161。

自の心理学あるいは解釈学を模索・構築したディルタイ(Dilthey, W. 1833-1911)は、中期ディルタイを代表する心理学論文「記述的・分析的心理学」(1894)の続編をなす「比較心理学 個性の研究」(1895/96)のなかで、個性化を支配する原理として次の三点を挙げている。1)生の単一性、2)類型、3)発展である。¹¹⁾「現実的なものの個性化にとって本質的なことは、ある特定の基本形態が、これをとりあえず類型と言っておくが、変容の戯れのなかでつねに反復する、ということである」¹²⁾。ここで類型(あるいは原型)とは、心理学的には「心的生の同型性」(Gleichförmigkeit des Seelenlebens)と呼べるものであり、また形態学の視点からは生成プロセスにおけるいわば求心力である。この求心作用を欠けば、有機体の形態はメタモルフォーゼという遠心的な形態形成の圧力のもとで、解体と混沌の危機にさらされる。メタモルフォーゼの理念とは「きわめて尊いと同時に、きわめて危険な天からの賜物」であって、まさしく遠心力である。「もしもこれと釣りあう反対の力があたえられなかったら、無限の彼方へ迷いこんでしまうであろう」¹³⁾。この両者の生命原理による構成力が産みだす微妙な均衡のもとで、有機体のダイナミズムは展開するのである。

ディルタイが指摘するように直観、比較、原型、メタモルフォーゼは、ゲート形態学を構成する主要理念である。これらの理念を

駆使しつつ、ゲートは生き生きと躍動する形態である有機体を、形と力の両面から考察しようとしたわけである。さてディルタイはゲート形態学による主要理念を継承しながら、生の有機的生成の具体的な姿を、直観あるいは比較の方法を駆使して独自に迫ろうとする。たとえばその記述的・分析的心理学は、人間の高度な心的生のなかに同型的にあらわれる構成要素と連関を叙述しようとする。あらゆる個人を貫いている構成要素の同種性やプロセスの同型性に基づいて、この人間のなかにいまや個性・個性間の差異のニュアンス・類似性・類型が現われてくる。つまりこれらのことが比較心理学の対象なのである¹⁴⁾。それは「有機的な世界や人間の歴史世界のなかでの個性化という大きな謎を、比較という方法によって解こうとする」¹⁵⁾のものであった。ただしそうしたディルタイの方法論は、認識主観の恣意性を前提としている点で、これまでたびたび曖昧で「いかがわしい」ものと批判されてきた。¹⁶⁾

ディルタイによれば、さまざまな個性間の差異あるいは微妙なニュアンスの相違は、そもそも心的同型性(類型)に基づいた構成要素の量的なヴァリエーションによるものであって、それはおよそ質的なものではない。もし他者を理解できる根拠をこうした量化の論理にもとめるとすれば、なるほどそれは本来の他者性、自己との異質性を見失

11) Wilhelm Dilthey, Über vergleichende Psychologie. Beiträge zum Studium der Individualität. 1895/96. Gesammelte Schriften, Bd. 5, Göttingen (Vandenhoeck) 1957. S. 270.

12) ibid.

13) Johann Wolfgang von Goethe, Hamburger Ausgabe (HA) Bd. 13. S. 35.

14) Dilthey, GS. Bd. 5, S. 241.

15) ibid. S. 310.

16) 高橋義人 1984年、「ディルタイ解釈学の形態学的視座」『思想』716, 岩波書店: 38.

い、擬似自然科学の方法論へと墮してしま
うであろう。¹⁷⁾ここに類型 Typus 概
念をめぐる難問がひかえていよう。

さて形態学では、一般的(普遍)なものと
個別的(特殊)なものとの有機的に結びつ
き、単一性をたもちながら発展していく点
に、個性化のもっとも固有の特質が認めら
れよう。共時態としての個性化は、通時態
としての心的同型性を基盤に生成してゆく。
あるいはTypus(原型/類型)という本来ス
タティックな構造理念が、メタモルフォー
ゼの圧力のもとで変容をくりかえす。それ
は自然発生的にあたえられた類型構造が、
歴史的に時間系列のなかで発展してゆく
という見方であるよりも、むしろ重層化ある
いは階層化された普遍的な論理構造(Ur-
Strukturと呼んでもよい)を直観と比較の手
法でもって探りあてようとする試みである。
[なるほどゲートは、植物の原構造を原植物
(Urphranze)という直観像(原現象)のう
ちに把握できればよく、それを実際に見つ
けだす必要はかならずしもなかったであ
ろう。]

治癒の感覚論

さらにここで有機体の論理を具体的に敷
衍するために、感覚機能のありかたと治癒
作用との連関について述べておこう。

分析心理学からの観点による分析・治療
の具体的な展開は、きわめて重層的な治療
状況(場面)を構成することになるが、こ
こではとくに遊戯作用のダイナミズムがもた

らす治癒機制に焦点をしばりながら、感覚
との連関をさぐっていきたい。ところで創
造的で自由な遊戯活動がもたらす根源的な
治癒の働きについては、箱庭療法をモデル
化しながら以前指摘しておいた。¹⁸⁾ここ
ではさらに論点を掘り下げるために、感覚と
りわけ触覚 蝕知 がもたらす治癒作
用について考察してみたい。

さてユングは晩年の自伝のなかで、きわ
めて印象深い砂遊びについて回想している。
ユングを引用してみよう。

毎日私は天気さえよければ、昼食のあと
でこの建築遊びをつづけた。食事が終わ
るとすぐに遊びははじめ患者がやってくる
まで遊びつづけた。そして夕方仕事はは
やく終わると、ふたたび建築の仕事にも
どっていった。こうしていると、私の考え
は明確になり、心のなかでおぼろげに感じ
とっていた空想を把握することができた。
もちろん私は自分の遊びの意味について
考えてみた。「いったいおまえは何をして
いるのか。おまえは小さな町を造り、それ
をまるで儀式のようにしておこなってい
る！ 私はこれに答えることはできなかつ
たが、私には自分自身の神話を見いだす途
上にあるという内的な確信があった。こ
の建築遊びは、すなわちひとつの始まりに
すぎなかった。(中略)その後の人生でも
生きづまっていまうたびに私は絵を描い
たり、石に彫刻した。そうしたことは、あ
とから生じてくる考えや仕事のための入
門の儀式(rite d'entrée)であった。¹⁹⁾

ここには後年、ユング派のもとで独創的
に発展することになる「砂遊び療法」
(Sandspieltherapie)のいわば原点とも言え
るような体験が語りだされている。砂遊び

17) デルタイのいわゆる「量の理論」については、同、48-49 参照。

18) 拙著『ユング個性化思想の構造』第 4 章参照のこと。

19) Jung, *Erinnerungen, Träume, Gedanken*. Olten. 1985. 3 Auflage. S. 178.

療法とは、ロンドンの小児科医マルグリット・ローエンフェルト (Lowenfeld, M.) によって1929年に創始された子どものための遊戯療法である。彼女は従来の子どもに対する精神分析療法がややもすると解釈の押しつけと思われる点に反対して、子どもに遊びをつうじて自由に表現活動させることによって治療効果をひきだした。この一見奇抜とも見える治療技法は、さらにユングの示唆のもとで、分析家カルフ (Kalff, D. M.) によって独創的に発展をとげる。

別名「世界技法」(The World Technique) とも呼ばれるように、それは子どもの内面世界をもつばら非言語的媒体²⁰⁾をとおして、規格化された砂箱空間²¹⁾のなかに内発的に自己表出させる。そしてそこで展開されるいわばマイクロコスモス的世界の創出と変容が、子どもの内面世界 マクロコスモスのセルフの自己実現化のプロセスと いわば表裏一体となって同調・共鳴する事態をめざす。こうした共振し共鳴しあう関係のなかに、はじめて治療のための臨床場面が開かれるのである。

さてここで特に留意したいのは、先に引

用したユングの記述にみられる「建築遊び」の意味である。当時ユングは、初期の精神分析運動から袂をわかち、フロイトとのもはや修復しようのない関係の破綻から深刻な危機に瀕していた。このフロイディズムからの決別ののち、数年におよぶユングの「ネキユイア(魂の夜の航海)」がはじまる。「人生の午後」²²⁾がもたらすであろう生の豊穡さを予感しながらも、このネキユイアはいわば絶体絶命の危機的状况のもとで開始した。分析心理学の基本構想をなす元型理論の端緒が直観的ながら把握されたのもまさにこうした時期であり、それは対社会的な激しい孤立感ならびに深層意識から湧出してくる象徴的な形象・イメージをもはや統御できなくなるといった深刻な無力感のもとで²³⁾、かろうじて達成された。自伝から引用してみよう。

その頃私は心の仕事に没頭していた。私はそれを愛し、そして憎んだ。だがそれは私の最大の富であった。それに専心することは、制約された全体としてみずからの存在に耐えて生きることのできる唯一の可能性であった。今日、私は最初の体験

20) あらかじめ治療室に用意されたさまざまなミニチュアの玩具、たとえば人物・動物・樹木・建物・乗り物・怪獣などを用いる。

21) 72 × 57 × 7センチに規格化されている。

22) 「青春のワインは壮年期を迎えても、かならずしも澄んでくるわけではない。しばしばそれは濁ることもある」。ユングは、『人生の転機』(G. W. 8, 1931)と題する講演記録のなかで、みずから終生追究することになる主題について、さりげなく述べている。「人生の午後(Nachmittag des Lebens)を、午前とおなじ要領で生きることはいできない。というのは、朝にはたくさんあったものが夕べにはなくなり、朝には真実であったものが、夕べには真実ではないのだから」。その主題とは、この「人生の午後」生涯後半の発達課題にとりわけ焦点化される個性化である。このユング特有のミスティフィケーションを多分に含んだ生のイメージは、ひとをときに魅惑し、ときに惑わせる。

23) 「無意識を身をもって体験し経験することで、私の知的活動はまったく滞ってしまった。『リビドーの変容と象徴』(1911)を完成してから三年間にわたり私は学問的な本を読むことすらできなかった。それで私はもはや知的な人々の世界ではやっていけないし、今自分が没頭していることについて話すこともできないと感じていた。無意識から明るみに出された素材に圧倒されて、私は文字どおりものも言えなかった」。Jung, *Erinnerungen, Träume, Gedanken*. S. 197.

から疎遠になってはいない。あらゆる私の仕事、精神的な活動は、これら最初の空想や夢から生じてきている。それは1912年に始まり、このかたほぼ50年に及んでいる。私が後年やり遂げたことはすべて、すでにそこに含まれていた。ただし初めは情動やイメージといったかたちではあったが。²⁴⁾

ところで遊戯療法にそなわる治療構造を分析するには、多面的なアプローチが可能であるが、砂遊び(建築遊び)には無造作に造形と破壊を繰り返しながら、そこに遊動する独自のリズム振動と共振しながら、変調をきたした実存に自己律動化をうながす点が顕著であろう。自己脱却と自己創造の運動が律動的に生成することによって、実存の不協和は調整されていく。ここに遊戯のリズム性に本来そなわる治癒的契機が認められよう。砂遊びでは、直に指先で砂に触れあい、思い思いの造形の愉しみにとりあえず身をゆだねることが、治癒への端緒をひらく。「ふれることだけが、ふれるものとふれられるものの相互嵌入、転移、交叉、ふれ合いといったような力動的な場における生起という構造をもっている」²⁵⁾。ここでは意識と対象とを分離しがちで、主客対立的な視覚性とはちがって、相互浸透的で主客未分とも言える触覚性が主導している。視覚の(冷たい)遠隔性・表層性のかわりに、いわば実存を「ハレ」へと誘導する隣接器官としての触覚の身体性が前面化してくる。²⁶⁾ 自他の相互浸透性に基づけられたパトス的關係、ここから内部に閉塞化

してしまった実存の開放感もたらされる。

モリヌークス問題

ここで触覚・触知の問題をあらためて掘りさげるために、少々迂遠ながら18世紀西欧の知的感性にとってきわめて魅惑的なトピックスでありえたモリヌークス(Molyneux)問題に視点を転じてみたい。ただしモリヌークス問題は当時の哲学(美学)・心理学・医学(生理学)等、広範にわたる領域からの活発な関心を引きおこし、18世紀西欧の経験論・感覚論をいわば横断する性格のものであるため、ここでは論点を臨床的側面に絞ることにする。

さてモリヌークス問題とは、なにか。それはロックが『人間知性論』(第二版)のなかで言及した視覚と触覚をめぐる議論である(1693)。ロックを引用してみよう。

生まれつきの盲人が今は成人して、同じ金属のほぼ同じ大きさの立方体と球体を触覚で区別することを教わり、それぞれに触れるとき、どちらが立方体で、どちらが球体かを告げるようになったとしよう。問い。盲人は見える今、触れる前に視覚で区別でき、どちらが球体で、どちらが立方体かを言えるか。これに対して、鋭く明敏な問題提出者[モリヌークス氏]は、言えないと答える。なぜなら、盲人は、球体がどう触覚を感発し、立方体がどう感発するかの経験をえてしまっているが、触覚をかくかく感発するものは視覚をかくかくに感発しなければならないという経験、すなわち、手を不均等に押す押す立方体の尖った角は、目に立方体の尖った角の現われ方

24) ibid. S. 196.

25) 西村清和 1992年、『遊びの現象学』勁草書房：28.

26) 小田部胤久 1995年、『象徴の美学』東京大学出版会：134以下参照.

をしようという経験をまだえていないからである。私は、自分が誇らしく友人と呼ぶこの考え深い紳士のこの問題に対する答えと考えが一致して、盲人は触覚で立方体と球体を誤りなく名指せ、触れた形の違いで絶対確実に区別できるが、見ているだけの間は、初めて見てどちらが球体で、どちらが立方体かを絶対確実にとは言えないだろうという意見だ(第2巻第9章 § 8)²⁷⁾。

このモリヌークス問題を契機として喚起された触覚の機能をめぐる関心は、ただちにライブニッツ(『人間知性新論』1703/65)、パークリー(『視覚新論』1709)らを触発する。さらに議論の舞台はフランスへと移され、ヴォルテール(『ニュートン哲学要綱』1738)、コンディヤック(『人間認識起源論』1746)、ディドロ(『盲人についての手紙』1749)、ピュフォン(『人間の博物史』1749)らを経由しながら、のちにヘルダー(『彫塑』1778)にまで及んでいる²⁸⁾。

ところで現代における解釈学の興隆が時代の反視覚的動向と鋭く対応していたように、18世紀感覚論における触覚の復権の試みもまた、近代のエートスがもたらした視覚性優位の体制によって貫かれてきたことへの異議申し立てという側面をもちえよう。そこでは触覚は視覚に匹敵する重要性をあらたに付与されるか、もしくはそれ以上の意義、すなわち視覚を含んだ諸々の感覚の基底 共通感覚(sensus communis)として位置づけられている。ここでは理性の

器官として突出した位置を占めつづけてきた視覚は、いわば二次的な派生感覚と解されることになり、あらたに知的感覚としての触覚という根源的なイメージが浮上してくるのである。本来モリヌークス問題はロックの意図するところによれば、感覚に由来する観念が経験による判断によっていかに変更を被っているかを、われわれは気づかないでいる点を強調するという経験論の趣旨にそって提出されたものである²⁹⁾。しかしこうした触覚優位の言説は、フランス唯物論、とりわけピュフォンらに代表される当時の生理学に継承されるなかで、「感覚を生命現象と結びつけて理解する生理学的解釈への傾斜」³⁰⁾を孕むようになった。つまり触覚はいわば諸々の感覚の基礎であり、生命の深層に深く根ざした生命感覚そのものとして理解されるのである。「我々の感覚とは、要するにどれも分化した触覚に他ならない」(ディドロ『ダランベールの夢』)³¹⁾。

諸々の感覚のなかで視覚の根源性あるいは優位性を主張する言説は、認識論的には「外界の実在性」をめぐる議論とも合い重なっている。たとえばカッシーラーは、モリヌークス問題の決定的・体系的な重要性に関して次のように述べている。「果たして『感官』はそれ自身だけでわれわれの意識のうちに物的世界像を産出することができるか、それともこの物的世界が産出されるためには感官は他の精神能力の協力を必要と

27) ジョン・ロック『人間知性論』(一)大槻春彦訳,岩波文庫:205。

28) 山中浩司「視覚と触覚 18世紀感覚論とヘルダー『彫塑論』」『ヘルダー研究』第4号,日本ヘルダー学会,1998参照。

29) 同:28。

30) 同:33。

31) 同:32。

するのか、そしてその場合この精神能力はどのようにして規定されるのか等々という普遍的問題は、モリヌークスが提出したこのひとつの具体問題から発したものである³²⁾。感覚論のコンテキストのなかで、触覚は「単独で外部の対象を判断する唯一の感覚」(コンディヤック)³³⁾とまで、その認識的優位性を重視されている。パークリーのような形而上学的な帰結を回避するかたちで、「外界の実在性」の証明が直に触覚的経験のうちに求められたのである。³⁴⁾

触覚の美学

モリヌークス問題を契機とした視覚と触覚の意義をめぐる問題意識はのちに、ヘルダー(Herder, J.G. 1744-1803)によって、あらたに触覚(Gefühl)の美学という視点のもとで継承される。すなわち触覚をめぐる18世紀の哲学・心理学・生理学等の一連の成果を踏まえながら、ヘルダーはその初期の代表的著作である『彫塑』(Plastik, 1778)において、彼独自の造形芸術論を構想している。それは従来の絵画と彫刻のありかたとともに視覚に対応させるバウムガルテン学派の美学 視覚の美学 に対して 絵画の視覚性と彫刻の触覚性を鋭く対置させて、触覚性により根源的な美的基準を求めると

いう触覚の美学という美学構想をはじめてもたらした。³⁵⁾

ヘルダーの美学構想においては、視覚、聴覚、触覚という各々の感覚の分析にもとづいて、そこから芸術の発生様式が考察される。図式的に例示すれば、以下のようになる。

並存的(nebeneinander)に捉える感覚
(視覚) 平面 絵画 空間
時間的に継起(nacheinander)する感覚
(聴覚) 音 詩・音楽 時間
内部へ入りこむ(ineinander)感覚(触覚)
立体・形 彫刻 力

いささか図式的にすぎるが、以上のように芸術の各ジャンルは、感覚論的に区分されることになる³⁶⁾。聴覚の問題はさておき、ここでとりわけ触覚の根源性が強調されており、それは「もっとも精緻で、もっとも哲学的な感覚」³⁷⁾とみなされる視覚に優先されるのである。「千の目があったとしても、触覚を持たず、触れる手がなければ、生涯をとおしてプラトンのいう洞窟にとどまり、そういう現象として以外にはまったく立体の性質を本来理解できないであろう」³⁸⁾。あるいは「目は道標にすぎず、手に対して判断を下すものにすぎない。手のみが形を教え、

32) カッシーラー 1997年、『啓蒙主義の哲学』中野好之訳、紀伊國屋書店：133。

33) 山中浩司「視覚と触覚」：32参照。

34) カッシーラーの解釈によれば、コンディヤックの感覚論的方法では、「外界の実在性」の問題を首尾一貫して解決できず、デイドロの「コンディヤックはパークリーの原理を採用しておきながらその帰結を回避しようとした」という指摘を引用している。同：144。

35) 小田部胤久『象徴の美学』第三章第一節参照。

36) Johann Gottfried Herder, Werke in 5 Bänden. Aufbau-Verlag Berlin und Weimar. Bd. 3. (Plastik), 1969. S. 85.

37) ibid. S. 80.

38) ibid. S. 76.

形が意味するもの、形にやどる概念を教えてください」³⁹⁾。たとえば身をかがめるようにして彫像のまわりを巡る愛好者の視覚とは、もはや触覚と化した視覚なのであり、彼はあたかも暗闇のなかを手探りするようにして見るわけである。彼の目は手であり、その指は光線である。⁴⁰⁾ みずから触覚と化した視覚は、もはや固定した視点をもつことなく、「彫刻を形成している線に沿って自ら運動し、彫刻の生成に立ち会いつつ見る」⁴¹⁾のである。

視覚経験の基底には実は触覚経験が媒介として生きており、われわれは視覚と触覚をつねに連動させながら、徐々に見ることを獲得する。従来の感覚論では視覚と比べてあまり省みられてこなかった触覚が、ここであらたに人間の根源的な感覚として、さらには諸感覚の基盤をなす共通感覚として呈示されているのである⁴²⁾。「視覚にあるのは夢であり、真実は触覚のうちにある」⁴³⁾。このようにヘルダーの触覚の美学では、視覚の美学とは対置されて、具体的で充実した美しい形を感知することが美的経験の核をなしている。「美しい形というものが、もともと視覚によって規定されるかどうか、この美しい形といった概念が視覚をその根源と見なし、その上級判事として認めるかどうかは、疑われるばかりでなく、ま

さに否定される」⁴⁴⁾。

さてこうした触覚の美学は、フランス思想に媒介された感覚論、たとえばビュフォン、ディドロ、コンディヤックらによる生理学的あるいは唯物論的色彩の濃厚な感覚論とは実質的にその論調を異にしている。先に触れたように、ヘルダーは触覚を内部へ入りこむ感覚として捉えていた。そこへあらたなカテゴリーとして生成する有機的な力の概念と関係づけるわけである。ヘルダーの美学理論「美と真の正しい現象学」⁴⁵⁾を特徴づけることになる完全性、調和、内的統一性と外的多様性、等々の指標は、あくまで内部から外部へむかって自己形成(個性化)しようとする有機的な生成力を前提としている。「あらゆる形態は、それがその内的ないきいきとした本質と一致する関係をもつように見えるがゆえに、それ自体として美しい」⁴⁶⁾。こうした内部と外部で密かに共鳴しあう造形的なダイナミズムを、触覚的感情(Gefühl)でもって感知すること、このことがヘルダーにとって造形芸術の美に迫る秘儀なのである。「内面的共鳴、つまり人間の自我全体を手探りされた姿のうちへ移し替えていく触覚、これこそが美の教師であり、美の手がかりなのである」⁴⁷⁾。

さてヘルダーは彫刻を真実、絵画を夢と

39) *ibid.* S. 107.

40) *ibid.* S. 82.

41) 小田部胤久『象徴の美学』: 141.

42) 「ヘルダーによれば、『同一の触覚があらゆる感官を通して変容する』のである。」同書: 137.

43) Herder, *ibid.* S. 78.

44) *ibid.* S. 81.

45) *ibid.* S. 80.

46) 山中浩司「視覚と触覚」: 39.

47) Herder, *ibid.* S. 125.

して捉えるのであるが⁴⁸⁾、歴史の歩みのなかでは「触れることから見ることへ」という推移は必然的でもある。彫刻芸術に代表される古代ギリシアから絵画芸術に代表される近代へ、という基本的歴史観をヘルダーも共有している。⁴⁹⁾ また系統発生に個体発生を重ねあわせると、「子供の描く絵画はなお彫刻的であり、子供の視覚はなお触覚的である」⁵⁰⁾ とも言えよう。子どもが遊戯しながら思い思いに造形する砂箱も、きわめて濃密な触覚的体験に浸されており、その視覚的イメージもまた触覚性を多分に含んでいよう。こうした触覚的パトスに貫かれた遊戯活動自体が、独自の治癒空間を開くものと思われる。

48) *ibid.* S. 87.

49) 小田部胤久 『象徴の美学』: 146.

50) 同書.